

第 1 部

景観に刻印された人間の 諸活動の痕跡を辿る 倭城・租界



蔚山城合戦図をめぐる

三鬼 清一郎

はじめに

景観・環境の問題は、歴史学には馴染みの薄いテーマである。これまでの研究が、文書や日記・記録など文字史料の分析を中心に据え、それを生み出した空間についての認識が希薄であったことが主たる理由といえよう。寺社との関わりで、聖なる地域として人為的な力を加えられずに守られてきた名所・旧跡も、歌枕として文芸作品に登場することがあっても、これを正面からとりあげた研究は少なかった⁽¹⁾。このようなことへの反省から、最近では、地理学・考古学など関連分野の研究手法や問題意識に刺激をうけ、歴史的景観の保存・復元や、それを介して人々の生活実態に迫り、貴重な文化遺産を後世に伝える努力もなされている。

環境や景観の問題は、それぞれの時代に特有な形をとって表出されるが、とりわけ重要な画期となるのは、15世紀後半から100年におよぶ戦国の争乱であろう。絶え間なく続いた戦争のなかで、百姓・町人は生業の場から引き裂かれ、田畑は荒廃し、町や村は焼き払われた。このようななかで人々は、荒地を開墾して耕地を拡げ、山野に道を付け、川の流れを変えて洪水を防ごうとするなど、さまざまな働きかけを行ってきた。このような、自然に対して変更を加える人間の営為は、当時の史料には「普請」と表現されているが(三鬼 1987)、それが新たな景観を生み出していったのである。

16世紀末に豊臣秀吉が企てた二度にわたる朝鮮出兵(文禄・慶長の役)は、景観に変更を加える最大の事件であった。国内では、すでに太閤検地の施行が全国に及び、石高制に基づく年貢徴収方式は確立しつつあった。大規模戦争を支える兵糧米の調達

のため、年貢増徴はピークに達しており、村落構造に与えた影響は計り知れない。

この、前近代社会におけるほとんど唯一の対外侵略戦争は、舞台が外国に拡がり、多大の損害を一般民衆に与えたため、マイナスの遺産は今日に及んでいる。それを真摯にうけとめ、研究に生かしていくことは我々の責務であるが、景観や環境といった非文字の世界を考える手掛かりも残されている。たとえば、倭城・倭館といった日本関係の建造物がそれにあたる⁽²⁾。

倭城⁽³⁾は、日本軍によって朝鮮半島に築かれた城郭で、南部の慶尚道・全羅道を中心に数多く存在する。国内で豊富な経験を積んできた武将達が、景観や環境の破壊を前提に、築城技術を駆使して短期間のうちに工事を遂行したものである。既存の施設に改変を加えたものもあるが、日本式の城郭であることに変わりはない。当然ながら民衆の怨嗟的になっており、当時の記録には、「倭之土窟」「賊窟」「賊壘」などと記されている(中井 1999)。しかし最近では、日韓の研究者による共同調査が行われ、史跡として保存される気運も高まっている。個々の倭城についての縄張り図も作成され、活発に研究が行われている。

倭館⁽⁴⁾は、室町時代に李氏朝鮮政府が、日本からの使節を接待するために設けた客館で、当初は三カ所存在したが、のち釜山の一カ所だけとなった。秀吉の出兵の際には、釜山城に包摂される形で消滅したが、江戸時代には復活し、対馬の宗氏を介して行われた外交・貿易に中心的な場を提供していた。いわば、日本との関係が安定していた時代に、朝鮮の風土のなかに築かれた建造物であるが、現存していない。

倭城・倭館ともに往時の姿を復元することは困難

であるが、絵図などに手掛かりが残されているので、それから探っていく必要がある。本稿は、たまたま接することができた一枚の合戦図を紹介しながら、上述の課題に近づこうとする試みである。

I 「朝鮮蔚山合戦之図」の紹介

ここに紹介するものは、「朝鮮蔚山合戦之図」という表題で前田育徳会尊経閣文庫⁽⁵⁾（東京都目黒区）に架蔵されている淡色彩の絵図（69.5cm×68.5cm）である。蔚山城は朝鮮半島の東南端（慶尚道）に位置するが、倭城が多く築かれている地帯からは、やや離れたところにある。慶長2年（1597）の豊臣秀吉による2度目の朝鮮出兵（慶長の役）のとき、加藤清正・浅野幸長や中国勢（毛利秀元の家臣である宍戸備前守元統が率いる一団）が築いた倭城である。同年12月22日、明・朝鮮の大軍に包囲されるが、そのとき工事は完成しておらず、壕・堀など外側の防禦ラインは弱体のまま籠城に入った。翌3年の正月4日に包囲が解かれ、明・朝鮮軍は撤退を開始するが、14日間にわたって激しい戦闘が繰りひろげられたのである。この蔚山城は、朝鮮側の史料には「島山城」と記されている（幣原 1910）。

この絵図は、一部に朱が用いられているが、全体が墨で描かれた略図で、地の色は淡青でスケッチ風のものである。特筆すべきは、戦闘の様相が時間の経過とともに詳細に記されていることで、諸将の配置状況、明・朝鮮軍の進入路・退却路なども知ることができる。文字で書かれた部分は以下の通りである。（図1、図2参照）

A ○慶長二 十二 廿二

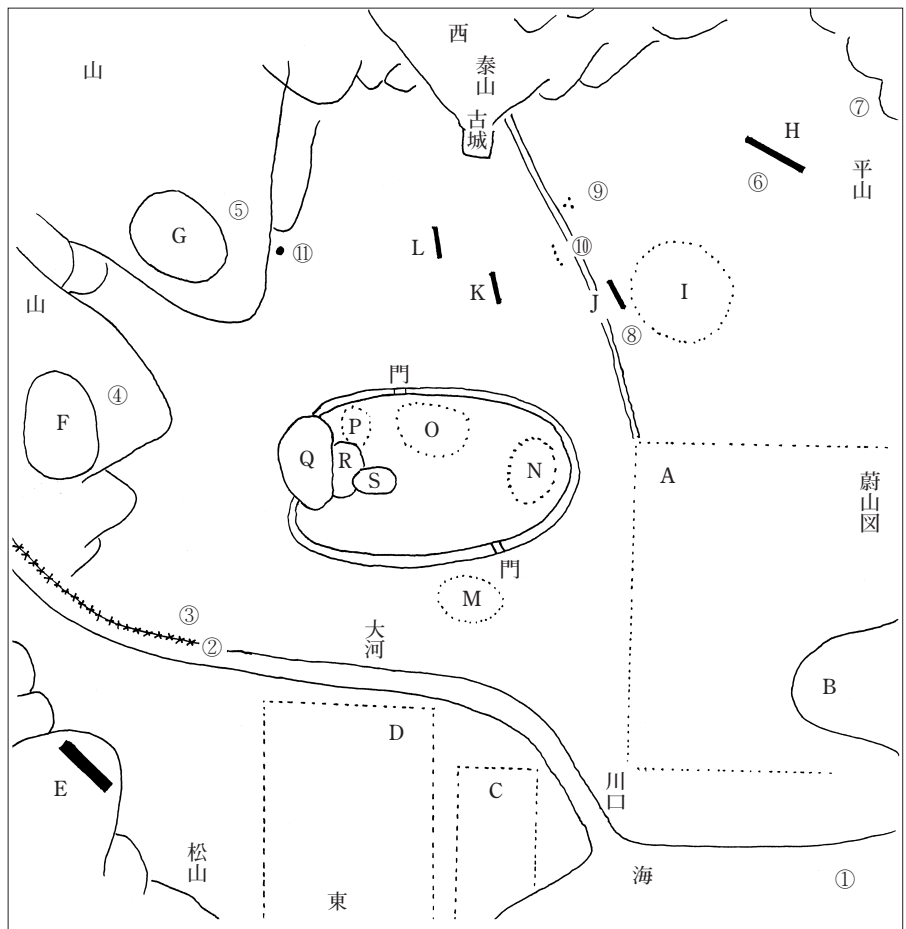
ノ曉、夜討シテ日本勢城中へ引取刻」 城戸口ニテ募敵引取、城中北東ハ浅野紀伊守堅」 西、中国勢堅（」は改行）

○同廿三日曉ヨリ惣責也、然所ニ、本城、肥後守ヨリ紀伊守へ」 以軍使云、早ク本丸へ可引上、無左ニ付テハ、肥後守可罷出旨ニ」 ヨリ、紀伊守本城へ可引上トスル所ニ、西ノ方火矢ニテ小屋ニ火」 カ、リ、敵乱入、道ヲ取切ニ付テ、紀伊守人数一手ニシテ、敵ヲ」 割テ城ニ入也、殿シタル兵少々被討取

○同廿四日、猶四方ヲ取捲責之、同廿五日ハ不責也、同廿六日」 又曉ヨリ責テ、其夜四五町退キ、開テ翌年正月三日マテ」 対陣ス、其十四ヶ日、城中曾無糧

○対陣ノ中、大明人ヨリアツカヒヲ入、可引取、セツカイヘ申イヘトモ」 不可引取旨返事ス、又鎮守マラウヤカ陣取、山下ノ楠ノモトニテ」 双方ノ大将出合、和談シテ

図1 蔚山城合戦略図



敵ヲ可引取由ニ付、肥後守可出旨雖被申」
紀伊守ヨリ飛驒守就無承引、又破

○此人数、大明ヨリノ加勢也

○此城、日本勢為取手築城、皆石垣」山ノ上
ナルニ依テ、石垣ノ高サ二三間、角」矢
藏ノ下ハ七間也、又本丸ノ間ノ前ニ」水
ノ手ノ左可拵図ノ所ニ、未出来内ニ被寄也、
加藤清兵衛小屋所ニ」清水アリ

B カイホウト

將郎耶自分の勢」六万、加勢四万、都合」

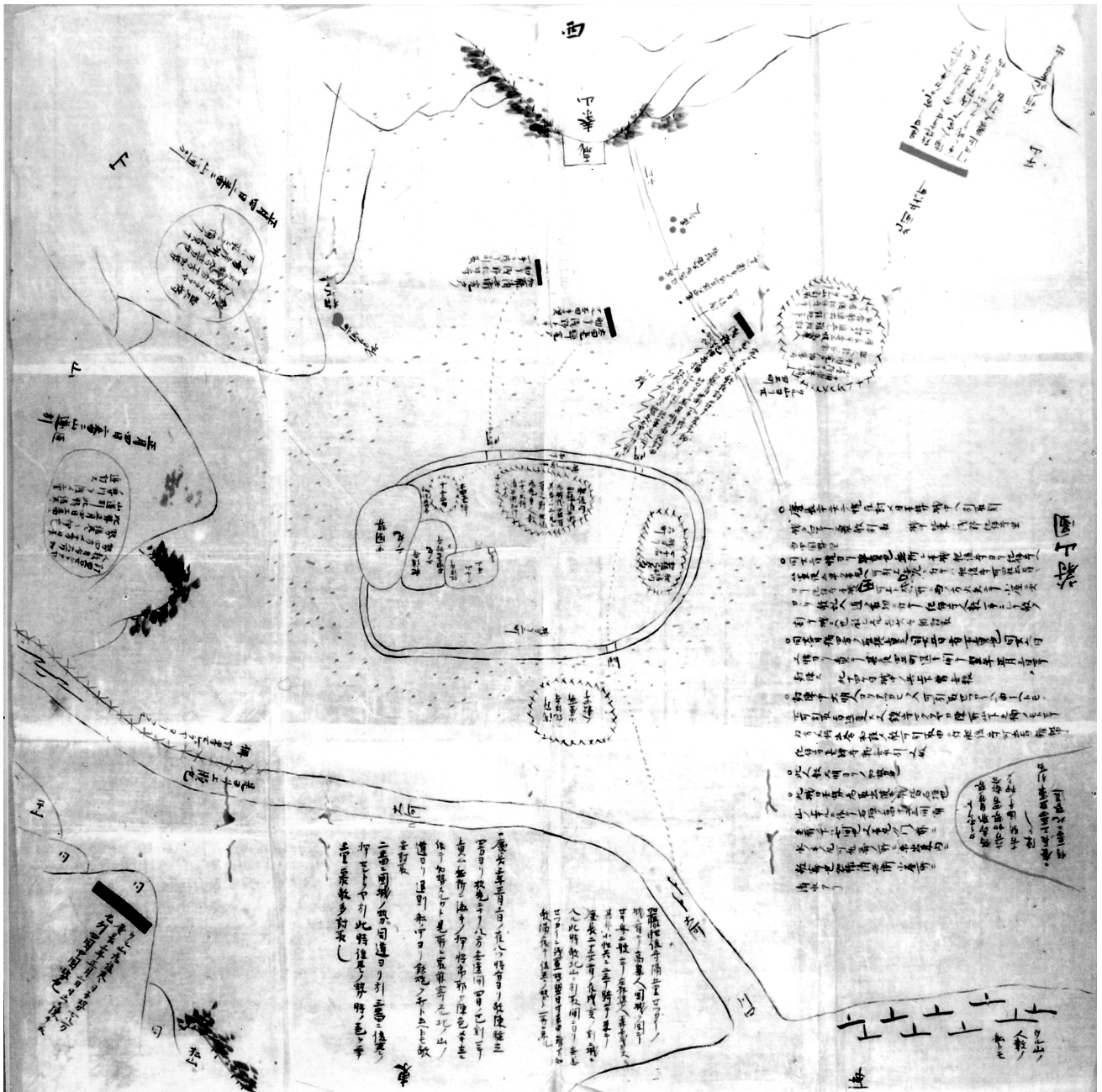
十萬騎、海手ノ押トシテ」陣之（※ 囲みは
朱線）

○慶長三 正 四、惣勢引取」時、一番ニ
此勢引

① ウル山ノ」人数ノ」船トモ

C 加藤肥後守隔五里、セツカイノ」城ニ有テ、
高麗人圍城ヲ聞テ」セキ舟二艘ニテ、庄林
隼人・森本義大夫」其外小性共ニ、二三十
騎ニテ来テ」慶長二十二廿二日ノ夜、戌亥
ノ刻ニ城ニ」入ル、此時、敵北山ニ引取間

図2 朝鮮蔚山合戦之図（前田育徳会尊経閣文庫所蔵）



ニヨリ無恙セツカイニ残置勢、翌日可来由雖
下知」 敵隔ニ依テ、後卷ニ勢ト一所ニ来ル

D ○慶長三年正月三日ノ夜八ッ時分ヨリ、敵陣
騒立」 四方ヨリ 先ニナリ、八方無透間、
四日ノ巳刻マテ」 責ム、然所ニ、海手ノ押
將郎耶カ陣、色メキ立ニ」 依テ、加勢スル
カト見所ニ、最前寄タル北ノ山ノ」 道ヨリ
退、則船ノ中ヨリ鉄炮ヲ打ト云ヘトモ、敵」
無討取
二番ニ圍城ノ勢、道道ヨリ引、三番ニ後卷ノ」
押セントカヤ引、此時後卷ノ勢、時ノ声ヲ拳、
三里募、敵多打取申候

E ウル山為後卷、日本勢七八万」 慶長三年正
月二日、日出ニ陣ヲ取」 九州・四国・中国
勢也（※陣形を墨で表示している）

② 此ヨリ先 瀬也

③ 柵 計略セントカヤ ヨリツク
（※朱の×印が線状に続いている）

F 計略セントカヤ、人数、自分六万、加」 勢
四万、メ十万、日本」 勢後卷之押也
此勢、正月四日、三番ニ」 山道引、此時後
卷」 ノ勢、川ヲ渡ッテ三里」 追討ス
（※囲みの線は朱）

④ 正月四日、二番ニ山通引

G 惣大将 鎮守 マラウヤ
人数、自分十万、加勢」 廿万、都合卅万也
廿万ニテ城ヲ責、十」 万ハ所々ニ備フ
（※囲みの線は朱）

⑤ 正月四日、二番ニ山通引

⑥ 此間五六町

H 是ヨリ穴戸カ手へ夜討シテ」 鉄炮ニテセリ
合テ引取、爰ニ」 備、又穴戸・浅野紀伊守」
一手ニ成テ、ウル山ニ引取時」 門口迄募、
又引取（※陣形を朱で表示している）

⑦ 大明人、此方ヨリ出

⑧ ウル山ヨリ廿四五町

I 中国衆普請、小屋所ナリ、毛利内穴戸備後守」
惣人数一万余（※囲みの点線は墨）
慶長二 十二 廿二暁、高麗人」 夜討シテ
追出シ、雖被討、取合、敵追出シ、鉄炮ニテ」
セリ合、後備後守一手ニ」 成テ、ウル山ニ
引取

J 穴戸カ手へ敵夜討ニ付テ、爰ニテ師シテ」
穴戸并太田・加藤清兵衛一手ニ成テ、此口ヨ
リ取、其時太田被討由

浅野紀伊守備 紀伊守聞テ、於軍定ハ可」
討死ト云、門外ニ暫支、太田・浅野ニ引
（※陣形を墨で表示している）

⑨ (朱点3ッ) 唐三人

⑩ (朱点) 唐人
（朱点）同落馬、大隅討取
（墨点）亀田大隅、高名シテ本陣へ来ル
（墨点）浅野壱岐

K 太田飛驒、穴戸ヲ」 助テ、浅野紀伊守一手
ニ」 ナル、太田手負
（※陣形を墨で表示している）

L 加藤清兵衛、穴戸ヲ」 助テ、浅野紀伊守」
一手ニ成テ引取（※陣形を墨で表示している）

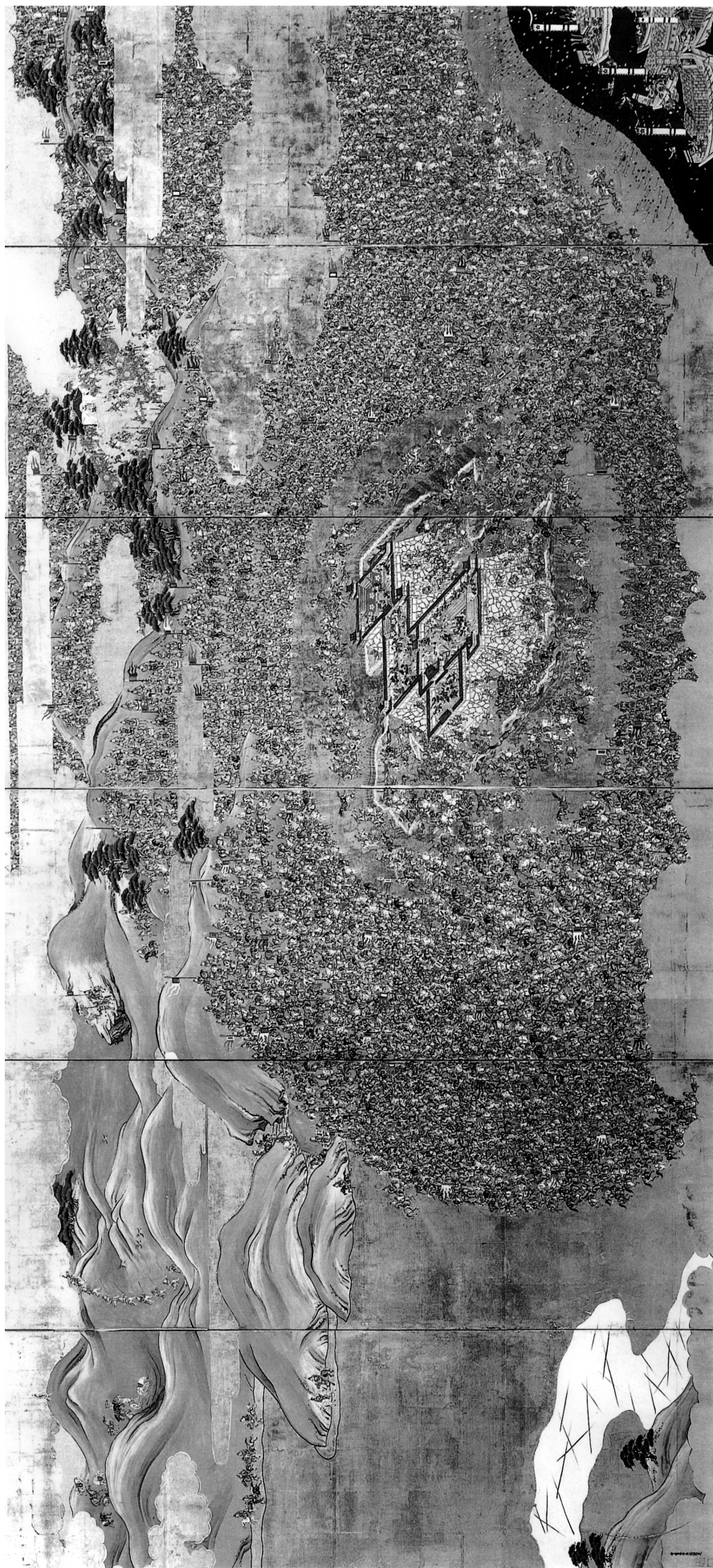
⑪ (朱点) 城ヨリ間二町ノ枸杞木

M 浅野紀伊守」 小屋一所」 人数四千
（※囲みの点線は墨）

N 肥後内」 加藤与左衛門」 七千石」 城ヨリ
六町（※囲みの点線は墨）

O 肥後内」 加藤清兵衛」 為城代罷有」 其
身ハ二ノ丸ニ」 有之、即肥後為先手、人数」
二千ノ大将、清兵衛知行八千石
（※囲みの点線は墨）

図3 朝鮮軍陣図屏風（鍋島報效会所蔵）



P 太田飛驒」 千二三百」 知行五万石

(※囲みの点線は墨)

Q 中国勢」 三ノ丸 (※囲みの線は墨)

R 肥後守」 二ノ丸」 太田飛驒守

(※囲みの線は墨)

S 紀伊守」 ウル山」 本山 (※囲みの線は墨)

II 「朝鮮蔚山合戦之図」の検討

この絵図(以下、Xと略す)の史料価値については、後述する『浅野家文書』所収の「浅野幸長高麗陣蔚山表覚書」など3通の覚書(以下、Yと略す)と基本的に一致しており、さらに詳細に当時の状況を知ることができる。覚書の筆者はいずれも幸長で、記事には重複する箇所が多い。ほかにも、幸長が籠城後に出した書状の写しも残っているが、これはYの内容を秀吉や諸大名に伝えたものである。XとYは相互に関係なく作成されたもので、内容に不自然な箇所は見あたらない。また、城郭の描き方や地形など全体の構図は、鍋島報効会所蔵の「朝鮮軍陣図屏風」の第一図(以下、Zと略す)とも合致している。

この絵図の作者は誰だろうか。「蔚山之御城出来仕目録」(Y所収)によれば、築城に参画したのは、① 宍戸備前守(元統)が率いる中国衆、② 浅野左京大夫(幸長)、③ 加藤主計頭(清正)の三者で、石垣、居矢蔵、塀などの工事はそれぞれが分担したが、形式的には浅野と宍戸が城普請を行い、加藤がそれを請取っている。引渡しの日付は12月23日で、明・朝鮮の大軍に包圍された直後にあたる。名目上は蔚山城は清正の城であるが、工事を担当した軍勢がそのまま籠城し、攻防戦に加わっていることは、この絵図からも確認できよう。ほかに太田飛驒守(一吉)など若干の武将も加わっていたが、人数は僅かで、補助的な部署に配置されている。それゆえ、この絵図の作者は、①～③の関係者に限られるであろう。

この絵図は前田家の所蔵となっているが、もしも①であれば、宍戸は毛利秀元の家臣であるから、毛利家(または毛利一門の家)に、②であれば浅野家に伝来した筈で、前田家に入る可能性はゼロに等しい。③の場合、加藤家は寛永9年(1632)二代目の忠広のとき改易された。家臣は浪人となり、文書類も四散したが、その一部は重臣層が分散して保管しており、のちに仕官した大名家に献上され、現存している。

豊臣秀吉発給文書に限っていえば、清正は天正16年(1588)に肥後半国を与えられ熊本城に入るが、入国以前のは紀伊徳川家に、以後のものは前田家に多く残されている。前田家に伝来するこの絵図は、清正の家臣として籠城した武将が、帰国後に記憶をたどりながら、後世のための記録として書き残したもので、本人またはその子孫が、のちに前田家に仕官した際に持参したと推定される。内容的には、実際の戦闘に加わった者でなければ知り得ないような記述が随所にみられる。絵図が作成されたのは、江戸時代初頭であろう。

籠城のとき、浅野幸長は長慶・左京大夫を名乗っているが、絵図には紀伊守と記されている。幸長の家臣であれば、主君の官職名は正確に認識しているから、そのような記述の誤りは起こりえないであろう。幸長は関ヶ原の戦いでは徳川方に加わり、その功績により家康から紀州一国を与えられ、慶長6年(1601)に和歌山に入部した。紀伊守に改めるのはそれ以降である。慶長18年に没するが、晩年はみずから紀伊守と名乗っている。この絵図は、幸長が紀伊守と強く認識されている時期に作成されたと思われる。

絵図の記載内容については、説明文はすべて墨で書かれているが、点や線は墨・朱の二色が使われており、朱は明・朝鮮軍関係を示している。壕で囲まれた蔚山城の周辺には朱点が無数に記されているが、これは退却時に残された死骸の山である。Yには「大明人数十万罷出」と記載され、Zには蔚山城を取り囲む夥しい軍勢が描かれている。死体が1万余という記録もあるので、朱点の多さは誇張でないと思われる。Pには大きめの朱点が三つあり、「唐

三人」と書かれている。この場所で、明の有力武将三人を討取ったという意味であろう。

Ⅲ 合戦の経過と結果

Xは加藤家側、Yは浅野家側が作成したものであるが、ともに慶長2年12月22日の早朝に蔚山城が明・朝鮮の大軍に包囲され、合戦が開始された時点から、14日間におよぶ籠城の様子が記されている。ここでは、両者を対比しながら、その経過を追ってみたい。なお、清正の軍勢は城内におり、普請に従事していたが、清正自身は30kmほど離れた西生浦城に留まっていた。この城は、文禄2年（1593）頃、清正が築いたもので、この地域での拠点城郭としての役割を果たしていた。急を聞いた清正は、20騎・舟2艘で手勢を率いて駆けつけ、同日の夜に幸長らの軍勢と合流した。このとき明・朝鮮の軍勢は北山附近に布陣していたので、包囲は手薄となっており、清正は容易に城内に入ることができたという。

22日の合戦は、不意を突かれたこともあって防戦に終始した。城の西側を固めていた中国勢は総崩れとなったが、北東を守備する浅野の軍勢と一体となり、辛うじて撃退することができた。清正は夜に城内に入り、すぐに幸長と軍議を行ったが、太田一吉は負傷して疲労が激しく、この席に加われなかった。清正は、西生浦城にいる家臣に蔚山城へ来るよう使者を出したが、すでに大軍に包囲されており、彼らが城に入ることは不可能だった。

23日の早朝、浅野が守備する惣構の東側を攻撃されたが、城内は指揮系統が明確でないため、かなり混乱した模様である。なお、西生浦城に残っていた清正の軍勢が、舟2、30艘で援軍に駆けつけた。付近の倭城に在番していた諸将も、これ以後、続々と救援の兵を送っており、城内の将士はそれに勇気づけられている。

24日も朝から合戦は続いたが、明・朝鮮軍に大量の死者が出たため引き返した。清正の援軍は、この日も舟から砲撃を加えた。

25日は、西生浦城からの援軍と思われる軍勢が、城の周辺に来ている。

26日は、清正の家臣である加藤与左衛門が固めるところ（N地点）を、竹束を用いて攻撃を仕掛けてきたが、それを焼き払った。

27日の昼頃、毛利壱岐守（吉成）、山口玄蕃頭（宗永）が舟で偵察に来た。互いに馬印を振って合図を交わした。

28日は、中国勢が守備する三の丸の櫓に、焼討が仕掛けられたが、防ぐことができた。この日も、西生浦城にいる清正の軍勢は、舟で川をのぼって鉄砲で攻撃し、かなりの打撃を与えている様子が城内から見えた。

29日は、安芸宰相（毛利秀元）、黒田甲斐守（長政）、竹中源介（重利）や、さらに山口宗永らが舟で偵察に来たことが、城内からも馬印で確認できた。この夜、我々は二手に分かれて夜討ちを敢行した。

正月朔日の夜、城内から、浅野の家来2人、太田一吉の家来1人を使者として、後続の支援軍に書状を遣わした。

2日の夜、清正の家来1人を、使者として城外へ送り出した。この日の午前、長宗我部土佐守父子（元親・盛親）が舟30艘で支援に来た。西生浦城に残っていた清正の軍勢も舟で川口まで来ているが上陸できなかった。午後には池田伊予守（秀氏）も舟で来ている。なお、長宗我部や池田ら四国の舟手勢が参着した日時については、同じYの中に「正月朔日申刻」とあり、僅かではあるが記事に食い違いがみられる。

3日、深夜に攻撃があり、合戦は翌4日の朝まで続いた。この夜における明・朝鮮軍の死傷者は、ことのほか多かった。

4日の午前、川手に陣をとっていた軍勢は山手へ引き揚げた。城中から使者を出し、状況を伝えた。大将の陣も、午後うちに体勢を解いて退却した。その夜、後続の支援軍の諸将は、いずれも城内に入った。

この間、注目すべきことは、明側から和議の申し入れがあったことである。Xでは、Aの箇所、日付は不詳であるが、西生浦城にいる清正の陣へ、軍勢を引き上げるよう申し入れがあったが拒否したとあり、Yには12月24日の申の刻（午後4時前後）と

日時が明記され、通事（通訳）が交渉に来たと述べられている。

明・朝鮮の大軍が撤退したのち、正月5日には、後続の支援軍や主だった武将が早朝から集まり、退却する明・朝鮮軍を慶州まで追撃するべきか否かについての軍議が行われている。これの内容には触れられていないが、長期にわたる苦しい籠城戦を経験した諸将は、蔚山城からの撤退も視野にいれた戦線縮小を秀吉に提言している。しかし秀吉は、蔚山城を足がかりとして、首都の漢城府を奪回し、さらに北進する希望を抱いていた（中野 2006: 329-356）。秀吉は蔚山城を、軍勢の通過地点に武具・兵糧を確保しておく「繋ぎの城」ではなく、拠点強化をはかるための恒久的な「仕置の城」と位置付けていた（白峰 2000）。このような在陣諸将との現実認識の相違は、諸将の間に深刻な亀裂を生じさせた事実が知られており、関ヶ原の戦いへと連なる要因となった（笠谷 1998）。この関係文書はYにも収録されている。

IV 「朝鮮軍陣図屏風」との関係

鍋島報効会所蔵の「朝鮮軍陣図屏風」の第一図（Z）には、籠城する加藤・浅野らの軍勢と、それを攻撃する明・朝鮮の大軍が描かれている。この屏風の由来については、藤口悦子氏が明らかにしている（藤口 1995）。それによれば、本来は六曲二双（四隻）であったが、すでに江戸時代に一隻が失われ、六曲三隻で現存している。便宜上、第一図、第二図、第三図と呼ばれており、ここで問題とするのは第一図（Z）である。（図3参照）

XとZとを比較したとき、基本的な構図は極めて類似していることが確認されよう。Zの第三扇には、城の周囲を明・朝鮮の大軍が立錐の余地がないほどに取り囲み、梯子をかけて城内に突入しようとする明・朝鮮軍に、城内から鉄砲で応戦する兵士など、激しい戦闘の状況が描かれている。XではN～Sで区画された城の内部で、兵糧攻めに苦しめられた兵士が死馬を食する悲惨な姿がみられる。XのAには、籠城の14日間は兵糧が欠乏したと記されており、

最後の頃には水や食料も底をついていたであろう。

Zの第一扇の下端は海で、四国水軍の雄である長宗我部氏の舟が浮かんでいる。長宗我部元親・盛親父子が舟30艘で戦闘に参加するのは、Yでは正月二日となっているから、籠城末期の情景を描いたものである。

Zの第二、三扇の上方には、明・朝鮮軍の本陣が描かれている。多くの日本側の史料では鶴城山と呼ばれているが、Xでは古城 泰山と記されている。第四扇から第六扇も、山の位置などはXと一致している。第六扇の下部には、Xで大河と記されている太和江が、氷結した姿をみせている。全体の位置関係はXと同じである。

戦前の蔚山城を実測した記録が紹介されている（黒田 2002）。それによれば、「浅野の出丸」である「東部洞城」のほかに「西部洞城」という曲輪が確認されている。これはXのOにあたるものと思われる。Zにもそれに相当するような区画が描かれている。

Zは、本来の「朝鮮軍陣図屏風」のなかで、いかなる位置を占めるべきか、また、欠損した一隻（仮に第四図とする）には、どのような図柄が描かれていたであろうか。これについては諸説あって決着をみていない。藤口悦子氏は、Zを右隻として第二図と対比させ、他の一組は、第三図を左隻に置き、右隻に配した欠損・第四図に描かれているのは、清正が出陣する姿を推定している（藤口 1995）。これに対して高橋修氏は、Zを左隻として、右隻の欠損・第四図と対比させるが、それには12月22日の夜、清正が蔚山城に入る場面を描いたとみなしている。他の一組は、第二図を右隻、第三図を左隻としている（高橋 2002）。また佐々木弘美氏は、Zを右隻、第二図を左隻とし、他の一組は、第三図を右隻とし、左隻に配した欠損・第四図には、敗走する明・朝鮮の大軍を、日本軍が追撃する場面を描いたとしている（佐々木 2007）。

鍋島直茂は、秀吉家臣のうちで、加藤清正と並び称されるほど、朝鮮出兵に積極的態度を示した武将である。朝鮮・中国へと版図の拡大をはかる秀吉の意図に沿って、みずからも海外で所領を与えられる

ことを希望した（日下 1893）。

このころ北九州沿岸地帯では、倭寇世界という時代的風潮のなかで、盛んに東アジア地域との交易が行われていた。鍋島氏の領国である肥前でも同様で、そのまま朝鮮・中国に留まるケースも少なくなかった。直茂は、もしも自分が海外に所領を与えられれば、その者たちも喜ぶであろうと述べている。このような人物を藩祖と仰ぐ鍋島家が描いた合戦図屏風であれば、それにふさわしい内容が盛り込まれている筈である。

第二図は、Zを半分だけ左方に移動させた構図で、救援に駆けつけた日本軍が、一列になって明・朝鮮軍に迫っていく様子が描かれている。先頭に立つ武将は、おそらく直茂であろう。Zと第二図は同じ時空で描かれており、これで一対とみなすのが自然である。

第三図は、さらに多数の日本軍が、明・朝鮮軍を追撃する場面で、敵味方は入り乱れた状態にある。当然ながら第二図よりも時間は経過しているが、これと欠損・第四図が一對になるのであれば、画題となるのは両軍の戦闘場面であろう。ここでクローズアップされるものは何であろうか。加藤清正の蔚山城での戦功か。あるいは、異国の戦場を颯爽と駆け抜ける藩祖直茂の勇姿か。この合戦図屏風に込められた制作者の意図を考えると、佐々木氏の見解が説得力が大きいように思われる。

V 邑城と倭城

朝鮮では古くから、都市全体を城壁で囲み、軍事・行政上の機能をもつ邑城が多く築かれていた。とりわけ李朝時代には、日本の侵攻に備えて造営が盛んであり、改修もすすめられた（中西 1994）。ただ、倭城は既存の邑城を転用したものも存在するが、基本は日本式城郭として新たに築造されたものであることを確認しておきたい。織豊期の城郭を象徴する天守・天守台も、蔚山城では確認できないものの、多くの倭城に存在している（高田 1998）。城郭の形態は、明軍のもつ強力な火器の威力が認識されるようになってからは、分散型ではなく、防禦を主眼と

した求心力の高いものに変化していった（太田 2001）。

蔚山城は、朝鮮半島南部の沿海地帯を確保するための拠点として築かれた砦（倭城）である。山地にあるため、石垣の高さは2、3間で、通常よりは低いが、隅櫓の下の高さは7間半ほどあった。戦前に蔚山城址保存会が編纂した『蔚山城址考』によれば（南角 1932）、蔚山城（蔚山倭城）とは、蔚山郡の東方の平野に立つ甑城山という小さな丘を、当時の蔚山内城の城址として認めたものである。日本人がこれを鶴城山と呼ぶのは誤りで、鶴城山は、蔚山城に隣接する神鶴山の別名が鶴城山ということから混同されたとのことである。

朝鮮古来の邑城としての蔚山城（蔚山邑城）は、蔚山本府に存在した。邑城付近には、城塀などに用いられた加工した巨石が散在しているが、これは、日本軍が石垣に用いたことを示す痕跡である。多くの場合、倭城を築くにあたって邑城は破壊されたのである。戦闘のとき、邑城は放火されたようで、地層中から焼米などが出土するとのことである。邑城と倭城は、歴史的景観を考えるうえで対極的存在といえよう。

おわりに

歴史的景観には、その土地に生きた人々の姿が刻みこまれ、生活の営みのなかで景観が形成されていくのであるが、文献史料に浮かびあがってくることは稀である。歴史学には、それを感知し認識する方法が十分に備わっていなかった。文字以外の形で無限に存在する資料の中から、それぞれの対象に即した方法で本質部分を摘出し、文字史料の世界を豊かにしていくことが、いまの歴史学に求められている。

文字史料はまた、非文字の世界に踏み込むうえでの手掛かりを与えている。たとえば、往時の人々の生活実態の解明をめざす民俗学に、江戸時代の地方書・地方文書は絶好の手引きで、宝の山でもある。文献史料の分析を基軸に据えた歴史学が果たすべき役割は、さらに大きくなっていくであろう。

（みき・せいいちろう）

【注】

- (1) その意味では、長谷川成一『失われた景観一名所が語る江戸時代』（吉川弘文館 1996年）は、先駆的業績といえよう。
- (2) この点については、「倭城・倭館・合戦図—文献史料との関わりをめぐって—」（『非文字資料研究』7号 2005年）で略述した。
- (3) 倭城の研究は、現在は非常に盛んであるが、今から30年ほど前までは、ほとんど顧みられなかったテーマである。そのような状況下で、民間有志で結成された倭城址研究会が、種々の困難な条件を克服し、実地調査をふまえた研究を続けてきたことの意義は大きい。『倭城Ⅰ—文禄慶長役における日本軍築城遺跡』（同会刊 1979年）は、その貴重な成果である。
- (4) 倭館についての研究も盛んである。代表的成果として、田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』（創文社 1981年）を挙げておく。
- (5) 尊経閣文庫には、このほかに「蔚山図」という表題の、ほぼ同じ絵図が架蔵されている。

【参考文献】

- 太田秀春 2001 「文禄・慶長の役における日本軍の築城観の変遷について—朝鮮邑城の利用から倭城築城への過程を中心に—」『朝鮮学報』181（のち『朝鮮の役と日朝城郭史の研究』に収録 清文堂 2006）
- 笠谷和比古 1998 「蔚山籠城戦と関ヶ原合戦」『倭城の研究』2（のち『関ヶ原合戦と近世の国制』に収録 思文閣 2000）
- 日下寛 1893 「鍋島直茂海外転封を望む」『史学雑誌』4（40）
- 黒田慶一 2002 「『蔚山城ノ防禦』図解説」『倭城の研究』5
- 佐々木弘美 2007 「『朝鮮軍陣図屏風』を読み解く—失われた一隻の真相と第三仮説を打ち出す—」『歴史民俗資料科学研究』12
- 幣原担 1910 「清正公と島山城」『歴史地理』16（1）
- 白峰旬 2000 「文禄・慶長の役における豊臣政権の諸城普請について」三鬼清一郎編『織豊期の政治構造』吉川弘文館
- 高田徹 1998 「倭城の天守について」『倭城の研究』2
- 高橋修 2004 「『蔚山合戦図屏風』の成立と展開」黒田慶一編『韓国の倭城と壬辰倭乱』岩田書店
- 中井均 1999 「倭城—その歴史と特徴—」『倭城の研究』3
- 中西章 1994 「邑誌からみた朝鮮李朝における慶尚道の邑城について」『城郭研究室年報』3、姫路城城郭研究所
- 中野等 2006 『秀吉の軍令と大陸侵攻』、吉川弘文館
- 藤口悦子 1995 「朝鮮軍陣図屏風」『別冊歴史読本10「戦国合戦図屏風」』
- 三鬼清一郎 1987 「普請と作事—大地と人間—」『日本の社会史』8、岩波書店
- 南角清 1932 「蔚山城址について」『史学会々報』7、神宮皇学館